

(「建築士」1978.4 日本建築士会連合会)

## 地域に根をおろした建築を

山口文象 (RIA 建築総合研究所相談役)

会誌《建築士》を通じ、士会の皆様との交流の機会を与えられた与とを心から喜んでおります。私も皆様の仲間に加えていただいて、力不足とはいえ、これからの建築界のために働きたい念願です。

戦前戦後を通じ今日までの社会情勢を思いますと、歴史文化の興亡の縮図をみるような気がいたします。大陸政策の発展にともなう軍部勢力の台頭、第二次大戦への参如、敗戦、そして今日に到る日本国民の絶望と苦しみは、まことに筆舌に尽くせません。世代によってこの感度の違いはありましようけれど、大きく言って日本民族の自覚と信念と、誇りの上に大きな変革をもたらしたことは間違いありません。明治維新の中途半端な民主主義革命はそれでも追いつけ追い越せのフル回転で、この国を大日本帝国にまでエスカレートさせて来ました。国民はこの調子で国は発展するものと信じ、ほんとうの意味の人間、社会、国家、そして世界を考える余裕を失ったかに見えます。このことはほんとうに重大なことでした。私共が今日改革しなければならない社会的欠陥の多くは、国民の個々の自覚の不足によると考えてよいのではないのでしょうか。

建築家とはなんでしょうか。世直しをする革命家でもなければ、権力的な政治家でもなければまた、施政の官僚でもない。私は建築家とは人間が幸せに生活することの出来る空間を創造する人間であると常に考えています。画家はキャンバスの上に絶対的な二次元の空間を創造するでしょうし、音楽家は無の空間の中に音の創造的な分割をこころみるでしょう。また、演劇も文学もすべての芸術は、すべて精神の昇華への創造的な行為でありましよう。しかし、建築家は人間全体を考え、すべての生活活動を包含する空間を創ることにあります。基本的な固体が複数となればファミリーであり、これの集合が社会となり、国が構成され、グローヴァルに広がって世界的な大きな生活空間になるわけですが、この形成とプロセスを建築家としての正しい視点から見つめ判断して、人間集団の営みに参加することが大切です。建築家は単に家を創ることだけでなく、よい社会を創り上げる基盤になることでしょう。技術者であると同時に思想家であり、人間の生活を総体的に把握出来得る芸術家であることが

望ましいのです。

近代建築の指導者は例外なく、彼等の青年時には小さな住宅、バラック、長屋など、いわゆる庶民の住宅問題に真剣に取り組み、経済的に切りつめられた条件のもとに1平方センチの空間分析に能力のすべてを投入いたしました。そして人間の究極的な用を Planning と構造の技術によって見事に解決してきました。フランク・ロイド・ライト、コルビュジェ、ワルター・グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ等、彼等の初期の作品がいかにもすばらしく、今日の建築の原点として軽々に見過ごすことは出来ないでしょう。人間の住む空間、＜住宅＞創造に修練を経ない建築は軽石のようにすき間だらけであります。基礎的な底辺の仕事から都市的な広い空間の視野に広がってゆきます。この頃発表されるいわゆる《新しい住宅、公共建築》はアクロバットの狂演であり、どこにも建築家としての謙譲な態度が見受けられません。思想的にも技術的にも見るに堪えないデザインの連続です。このことは外国の作家、日本の建築家の今日の傾向であって、その醜態はまことに目をおおいたくります。カッコウばかりよい建築では困ります。＜よく考えた建築＞こそ、現代には要求されています。

この会の諸兄は、地域的に研究会を持っておられるようです。この研究会を思弁的な、また饒舌の空回りにおわる集まりにはしたくありません。その地域の農漁村の民家、村落のなりたち、小さな城下町の都市的な考察など、調査や研究の対象にはこと欠かないでしょう。これらが、とりもなおさず地方文化の根であり、ここから歴史的な民族の姿が浮かびあがって来るはずですし、建築家の取り組まなければならない素材でもあります。毎日の具体的な仕事の他に与力(ママ)はないかもしれませんが、堪えて地方文化のためにまた、諸兄の正しい建築家への志向のためにも、やらなければならない＜仕事＞であるに違いありません。各青年部会の地味な研究が実って、充実した力が結集された時、われわれの建築士会は、わが国の建築家全体を指導し得る団体になるに違いありません。